

横浜市栄区・露木邸のバイク専用ガレージ。1340ccのハーレー・ダビッドソン「FXWG」と、652ccのBMW「F650GSダカール」が仲良く並ぶ。オン、オフどちらもOK。休日が待ち遠しい



ZERO SPACE ゼロに還る私室

一室、こだわり主義

「オレの空間」

そこにいると、時間が経つことも、空腹になることも、すべて忘れる。子供に還る？いや、もっと大昔のプリミティブな行動原理かもしれない。誰もが憧れる空間。好きなモノが最上級として君臨する絶対的な領域。バカみたい、と笑われてもいい。うん、笑っていてくれた方がいい。



■P38~45
写真 | 滝口 保
photo by TAKI

文 | トミヨリシヤ
text by Toshiya Tomiyori

■P46~47
写真・文 | 富田 隆
photo & text by Takashi Tomita



リビングと一体になった 鉄の馬の厩舎

●ハーレー・ダビッドソンと暮らす

左手前の黄色い梯子を上ると、強化プラスチック製のキャットウォークが張り出した寝室兼遊び部屋へ直行できる。6畳ほどのガレージ奥には、中庭を挟んでシンプルな和室が控えている。この開放感、そして見事な空間バランス

いつもそばに置いておきたい
悩ましくも愛しい「ボンコツ」

21インチのスポークホイール、5ガロンのデュアルタンク、センターコンソール＆ラージスピンドメーター、そしてプラットフォームにオレンジの火の玉ベイント。「調子はいいですよ。寒い日でもキック一発で掛かります」

横浜市戸塚区で接骨院を営む露木良さん所有の1981年式ワイドグライダー。手間はかかるが歴代エンジンの中でも最も官能的といわれる「シヨベルヘッド」を搭載した、「セクシー」なハーレー・ダビッドソンだ。

ガレージの愛車を居ながらにして眺められるリビング。いや、常時リビングにアクセスできるガレージとも言うべきだろうか。

「ずっと離れてたから、いつもそばに置いておきたかったんです。(家をつくるなら)ガレージ付きは絶対、というのはありましたね」

と語る露木さんとHDDとの付き合いは、すでに十数年以上になる。最初はレーサーレプリカ、そして国産アメリカンバイクを乗り継いで出会った1980年式のコンモスタージス。バイト先のソバ屋の近くにひっそり停まっていた



(上) リビングルームから見たガレージ。杉の木の感触に和む/
(下) 乗るときはしっかりと正装でキメる。好きな音楽はロック。お気に入りの、レイナード・スキナード、ジャニス・ジョプリン、そしてグレイトル・テッド

不動産だった。でも見る人が見れば宝物。「全然知らない家だったけど」いきなりピンポンして交渉、20万円で譲ってもらった。レストアに8ヶ月。そして納車3日後に全損事故。

「古いバイクってブレーキ効かないんですよね(笑)」で、骨折、入院。

人生ハードロック。笑い話のようだが、松葉杖をつけて受験。リハビリ生活。

「二度は(バイクを)降りようと思ったけど、ほとんど味わうことなく終わってしまったHDDの世界、一年半のプランクを経て現在の「コンモ」を手に入れた。ただし柔道整復師になるための研修は住み込みが条件。愛車は実家に置いたまま、たまに乗りに戻るという日々が続いた。ボンコツだったけど、

思い入れはたっぷりある。

やがて新築の自宅とともに理想のガレージを手に入れた露木さんだが、ド派手なエクゾーストが悩みの種なのは、他のすべてのHDD乗りと変わりなし。直管ドラッグ・パイプ。静かな住宅地で始動させるのはちやうとキツイ。

「下の道へスルスルと押しつけて掛けるか、ここでボンと掛けて速攻で飛び出していくかどうかですね」

でもまあ、そんな苦労も楽しい。と彼の笑顔が言わずとも語っている。



横浜市中区にある大畑邸。リビングルームから、あるいは中庭から眺めるガレージは、まるで立体絵画のようだ。多くのカーマニアが憧れる究極のデザイン美を鑑賞しながら、クルマ談義に花を咲かせる至福のひととき



和風モダンとゲルマン魂
その機能美の競演
●ポルシェ・カブリオレと暮らす



(上) いい感じで自然光が射し込む、リビング階上にあるダイニングキッチン。大畑さんは、ここで過ごす時間が結構多いとのこと
 (下) ダイニングの真下にはシンプルな和室、そして右手奥には庭を眺めながら入れる浴室。「行燈の光」をイメージした優しい明かりが、透過性ガラスを通して柔らかいムードを演出する



和の精神と合理主義は紙一重、新しいモダニズムのカタチを探る

デザインに対する「こだわり」はおそらく世界最強なのでは、と思われるドイツのポルシェ。初代911が誕生したのは1963年。以来、世界のスポーツカーを代表する存在として君臨し続けている。

そしてこの名車が40年以上に渡って一貫しているのが、リアエンジン・リアドライブ(RR)のレイアウトと、「フラット6」の通称をもつ水平対向6気筒エンジン。もちろん、現行の6代目911(コードネーム997)も初代から続く伝統を明確に受け継いでおり、先代で採用された涙目ヘッドランプの廃止以外は大きなフォルムの変更はない。

日本国内ではまだ数少ない最新型の997カブリオレを所有する横浜市本牧の大畑和敏さん。その自慢のガレージに何つて実車を拝見したところ、無機質なメタリックボディとココアブラウンのソフトトップが醸し出すエレガントな雰囲気非常に印象的であった。最近のオープン・スポーツカーはバリオルフ(電動可変ハードトップ)が一般的になってきたが、重量配分や重心の変化による動力性能の低下を

嫌ったポルシェ・デザインの様が、このフアブリック仕立ての軽い「幌」に表現されているように感じた。

納車は昨年の11月。「まだ雨の日は走らせたことがない」という大畑さんの言葉はけっして過保護ではなく、カブリオレ愛好者としては当たり前のア。真のスポーツカーは「日常の足」からもっとも遠い存在である。ガレージの床もただのコンクリートではなく、中庭と同じタイプの有機的なデザインのタイルが敷かれている。

そして、ギャラリイのようなガレージから家の中に入ると、セキュリティを考慮して窓を少なく高く配置した

外壁の印象とは対照的に、「近代和風」をコンセプトとした柔らかい光で満たされている。商業施設の環境プロデューサーを職とする大畑さん、当然、すべてのデザインに関して妥協は一切なし。ほぼ一年がかりで練りに練って設計された自宅は、普通ならば相反するような和と欧、それぞれの際立った美しさを見事に両立させている。

リビングから眺めたポルシェ・カブリオレも、不思議なことにまったく違和感なく、どの角度から見ても最初からこの組み合わせでデザインされていたかのようである。このガレージに似合う車は、他には考えられない。



隣には小さな神社。非常に静かなことに加え、桜、紅葉など、四季折々の風物を間近に楽しむこともできる